山と蝶

私を最初にこの地と結びつけたのは、雄大なカラコルムの自然と私の好きな蝶であった。何も初めから医療奉仕などという大それた考えがあった訳ではない。

一九六八年の六月、私は福岡の山岳会（福岡登高会、新貝勲会長）のティリチ・ミール遠征隊に参加して、初めてパキスタンの地を踏んだ。ティリチ・ミールは、カラコルム西方のヒンドゥクッシュ山脈の最高峰で、ちょうどアフガニスタンとパキスタン北西部を隔てる美しい山である。パキスタン側からのルートは、北西辺境州の北辺チトラールに入り、インダス河の支流であるチトラール川をさかのぼり、更にその一支流に沿って麓の村々を通過し、バルム氷河の末端にたどり着く。我々の登山活動は南壁側から、標高三八〇〇メートルの地点にベースキャンプが設営されて行われた。

ヒンドゥクッシュ山脈の最高峰ティリチ・ミール

累々と果てしなく連なる巨大な白峰がまず我々を圧倒する。見下ろせば、オアシスの村々もさながら緑の点となり、全ての人の営みが何か小さな、取るに足らぬもののように思われてくる。そこには、あらゆる人工の小細工を超越して君臨するひとつの力を感じ取ることができる。

北西辺境州は概ね熱砂の中央アジアに続く岩石沙漠で、村落は人口のオアシスとしてたいていは山間部に散在している。強烈な陽光と眩しい白雪を戴く荒々しい山塊のもとで、全てのものが壮大な自然をとおして啓示される力の前にひれ伏しているように見えるのである。